

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	府内整理番号	F I	技術表示箇所
G 0 6 F 9/06	4 5 0 Z	9367-5B		
1/00	3 7 0 F	7165-5B		
9/06	4 5 0 J	9367-5B		
G 0 7 F 17/00	B	9028-3E		

発明の数 1(全 12 頁)

(21)出願番号	特願平2-211406
(62)分割の表示	特願昭58-186100の分割
(22)出願日	昭和58年(1983)10月5日
(65)公開番号	特開平4-64129
(43)公開日	平成4年(1992)2月28日
審判番号	平4-20365

(71)出願人	999999999
	森 亮一
	東京都文京区白山1-24-12
(72)発明者	森 亮一
	東京都文京区白山1-24-12
(74)代理人	弁理士 長谷川 文廣 (外1名)

審判の合議体
 審判長 松尾 浩太郎
 審判官 大橋 隆夫
 審判官 吉岡 浩

(56)参考文献 特開 昭57-127249 (JP, A)
 特開 昭58-52765 (JP, A)

(54)【発明の名称】 ソフトウェア管理方式

1

2

【特許請求の範囲】

【請求項1】可搬の媒体に記録された有償ソフトウェアが利用者のデータ処理システムにおいて入力され利用される際に利用者に対するソフトウェア利用料金データを作成するソフトウェア管理方式において、
 上記可搬の媒体に記録された有償ソフトウェアと一体にソフトウェア権利者識別符号とソフトウェア利用料金とを含むソフトウェア固有データを設け、
 また上記利用者のデータ処理システムにはソフトウェアサービスシステムを設け、
 当該ソフトウェアサービスシステムは、
 有償ソフトウェアの利用者に対応した利用者識別符号およびソフトウェア利用可能金額を含む利用者固有データを格納した利用者固有データ記憶手段(9, 11),
 有償ソフトウェアの利用可否を判定する利用可否判定手

10

段(10),
 該利用可否判定手段(10)が利用可と判定した時、ソフトウェア固有データを含む利用明細データを格納するための利用ソフトウェア履歴格納手段、
 予め所定の金額が設定されているICカードを入力源として、該ICカードに設定されている金額を上記利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額の増額用金額として取り込むICカード入力手段(12)及び、
 上記ソフトウェア利用可能金額を、上記ICカード入力手段を介して入力される上記ICカードに設定されている金額によって増額処理する手段(32, 33)を備え、
 上記利用可否判定手段は利用者が上記有償ソフトウェアを利用する際、上記利用者固有データ中の利用者識別符号により利用者の正当性をチェックした後、

上記ソフトウェア固有データ中のソフトウェア利用料金が上記利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額又は

該利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額に I Cカードから取り込んだ増額用金額を加算して算出した修正されたソフトウェア利用可能金額を超過するかどうかを判定し、超過していない時に利用可能と判定し、利用可能と判定した場合、利用ソフトウェア履歴格納手段に上記ソフトウェア固有データを含むソフトウェア利用明細データを格納し、

上記利用ソフトウェア履歴格納手段に格納されているデータにより、ソフトウェア権利者対応にその有償ソフトウェアの利用状況を把握可能に管理することを特徴とするソフトウェア管理方式。

【発明の詳細な説明】

(a) 技術分野

本発明は、無形財産であるコンピュータ・プログラムやビデオ等のソフトウェアの管理方式に関し、特にソフトウェアの利用状況をソフトウェア権利者別などによって把握できるようにしたソフトウェア管理方式である。

(b) 発明の背景

近年、データ処理システムの発達と共に種々の有償プログラムが販売されるようになったが、その保護は不完全であり、プログラムの不正利用も多い。この不正利用を防ぐために、特許法、著作権法等には特別法などが検討されているが、ソフトウェアという極最近に至って生じた代物に対しては、何れをとってもその保護ということについては、不完全である。これは、単に無形財産／有形財産の問題ではなく、権利者がその取引を知っているか否かの問題であり、その点をうまく解決できるか否かが、この保護を行えるか否かの鍵となる。

(c) 従来の問題点

ソフトウェア、例えば、コンピュータ・プログラムでは一度利用者の手に渡るとそれ以後、どの様にそのプログラムが利用されているかを権利者は知らず、利用は全く野放しの状態である。この状態は本来利用しただけ支払うという取引き形態をコンピュータ・プログラムについてはとっていないことを意味し、一種の食い逃げが許されていることに等しい。この様な体制では、プログラムの利用料金は高くなってしまうだけでなく、粗悪なソフトウェアの氾濫を許し、極め細かなサービスを行うソフトウェアの提供意欲が減退してしまうものである。従って、若しコンピュータ・プログラムについてプログラム権利者に極め細かに保護を行うシステムを社会が提供すれば、該社会ではより良いプログラムの発生が促され、社会がより発展することになる。これは、コンピュータ・プログラムの占める需要性が増す将来において、極めて大事な問題である。

コンピュータ・プログラムを含む複写という従来における不正行為については、それを防御するための手段とし

て、電子計算機等のハードウェアに付与されている機番を用い、ソフトウェア自体にも該機番に相当する符号を付与し、プログラムの実行に際しては、ハードウェア機番とソフトウェアに付与された機番とを照合し、一致した場合のみ該ソフトウェアを実行させるようにして、利用出来ないようにする手法等はあった。（複写して取得されたソフトウェアは機番不一致になるので実行出来ない。）

しかしながら、その機番管理は大変だし、ましてや、有償ソフトウェアを店頭にて販売しようとすると、実質上その様な機番による方法は採用不可能であった。

(d) 発明の目的

従って、本発明の目的は、ソフトウェアの利用状況を権利者が把握できる様にすることにある。

(e) 発明の構成

この目的は、可搬の媒体に記録された有償ソフトウェアが利用者のデータ処理システムにおいて入力され利用される際に利用者に対するソフトウェア利用料金データを作成するソフトウェア管理方式において、

20 上記可搬の媒体に記録された有償ソフトウェアと一体にソフトウェア権利者識別符号とソフトウェア利用料金とを含むソフトウェア固有データを設け、

また上記利用者のデータ処理システムにはソフトウェアサービスシステムを設け、

当該ソフトウェアサービスシステムは、

有償ソフトウェアの利用者に対応した利用者識別符号およびソフトウェア利用可能金額を含む利用者固有データを格納した利用者固有データ記憶手段（9、11），有償ソフトウェアの利用可否を判定する利用可否判定手段（10），

該利用可否判定手段（10）が利用可と判定した時、ソフトウェア固有データを含む利用明細データを格納するための利用ソフトウェア履歴格納手段、

予め所定の金額が設定されている I Cカードを入力源として、該 I Cカードに設定されている金額を上記利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額の増額用金額として取り込む I Cカード入力手段（12）及び、

上記ソフトウェア利用可能金額を、上記 I Cカード入力手段を介して入力される上記 I Cカードに設定されている金額によって増額処理する手段（32、33）を備え、

上記利用可否判定手段は利用者が上記有償ソフトウェアを利用する際、上記利用者固有データ中の利用者識別符号により利用者の正当性をチェックした後、

上記ソフトウェア固有データ中のソフトウェア利用料金が上記利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額又は

該利用者固有データ中のソフトウェア利用可能金額に I Cカードから取り込んだ増額用金額を加算して算出した修正されたソフトウェア利用可能金額を超過するかどうか

かを判定し、超過していない時に利用可能と判定し、利用可能と判定した場合、利用ソフトウェア履歴格納手段に上記ソフトウェア固有データを含むソフトウェア利用明細データを格納し、上記利用ソフトウェア履歴格納手段に格納されているデータにより、ソフトウェア権利者対応にその有償ソフトウェアの利用状況を把握可能に管理することを特徴としている。

(f) 発明の実施例

第1図は、本発明のソフトウェア・サービス・システム (S S S) の概念を説明するための図である。図において、Pはソフトウェア権利者、P Pは有償ソフトウェア (Program Product)、P I D iはソフトウェア権利者識別符号とソフトウェア利用料金とを含むソフトウェア固有データ、U S E R I Dは利用者に対応したソフトウェア利用可能金額を含む利用者固有データ、C H E C Kは利用可否判定手段、S Hは利用ソフトウェア履歴格納手段、D P Sはデータ処理システム、S S Uはソフトウェア・サービス・ユニット、I Cカードはソフトウェア利用可能金額を増額させるために用いられる所定の金額がプリペイドあるいは信用付与されたカードである。

ソフトウェア権利者Pはソフトウェア固有データP I D iを含めた形で有償ソフトウェアP Pを提供する。ユーザのデータ処理システムD P Sでは、その有償ソフトウェアP Pを利用する際には、必ずソフトウェア・サービス・ユニットS S Uを経由する様に構成しており、そのソフトウェア・サービス・ユニットS S Uには利用者固有データU S E R I Dが格納されている。有償ソフトウェアP Pの利用要求が生じると、利用可否判定手段C H E C Kは、利用者固有データU S E R I Dに基づいて、指定されたソフトウェアの利用可能性をチェックする。例えば、資格の有無、その使用料金がそのユーザに許容されている利用可能金額以内か否かさらには利用可能時間以内か否かなどのチェックである。もし、OKであればその旨が図示されぬデータ処理システムD P Sのオペレーティング・システム (以下O Sと略す。) に通知されるとともに、利用ソフトウェア履歴格納手段S Hに利用者固有データU S E R I D及びソフトウェア固有データP I D iを含む利用明細データが格納される。もし、OKでなければ、利用できない旨の返答がデータ処理システムD P SのO Sになされる。ユーザの利用可能金額は、I Cカードを用いて増額されることができる。それらの入力残高データは利用ソフトウェア履歴格納手段S H内で管理される。

この利用ソフトウェア履歴格納手段S Hの内容は、ソフトウェア権利者Pが認識可能であるとともに、該利用ソフトウェア履歴格納手段S Hの内容により、たとえばソフトウェア利用料金をソフトウェア権利者別に求めることが可能となる。

本発明によれば、有償ソフトウェアP Pについての利用

状況がソフトウェア権利者Pに把握可能となるので、その利用状況に見合った割合で利用料金の徴収が可能となり、ソフトウェアの入手費用を安くしておくことで、利用者であるユーザは種々のソフトウェアを試用可能となり、且つ良いソフトウェアだけを利用してゆくことが可能となる。これにより、粗悪ソフトウェアは利用されなくなるし、良いソフトウェアはより頻繁に利用されるようになるので、ソフトウェア権利者Pは益々良いソフトウェアを提供しようと競い合うことになる。

第2図は、本発明が適用される1つの実施例の基本構成を示すものである。図において、1はユーザにおけるデータ処理システム、2は有償ソフトウェアである有償プログラムを管理する管理組合のS S 協会、3-1～3-nは有償プログラムに関する実施があった時にその対価を受領する権利のあるプログラム権利者 (複数権利者であった時は、その配分率情報も記入しておく。)、4 a～4 zは有償プログラムで、4 aと4 bはプログラム権利者3-1が作成したもの、4 yと4 zはプログラム権利者3-nが作成したもの、5と6は有償プログラム、7は中央処理システム、8はソフトウェア・サービス・ユニット (S S U)、9は利用者固有データ格納手段の一部で利用者識別符号を格納するユーザ識別符号メモリ、10は有償プログラムの利用可否を判定する利用可否判定手段である利用可否判定処理部、11は利用者固有データ格納手段の他の一部で通貨記号 (\$, ¥又は

€

など) を含めたユーザの利用可能金額を示す残高データを格納する残高メモリ及び利用ソフトウェア履歴格納手段を含む利用プログラム履歴メモリ、12は利用プログラム履歴メモリ11の内容の入出力を処理する入出力処理部、13は中央処理システム7におけるO S部、14は磁気ディスク装置、15はプリンタ、16はキーボード、17は表示装置、42は利用可能金額を増加させるためなどに用いられるI Cカードである。

さて、第2図のシステムにおいては、まずプログラムを作成し、そのプログラムを有償プログラムとして、一般に利用させ、且つその利用料金を確実に回収しようと志すプログラム権利者は、S S 協会へ行き、その利用料金の振り込み先口座名を登録し、プログラム権利者識別符号 (以下プログラム権利者I Dと称す。) を受け取る。協会では、各プログラム権利者に対して、異なったプログラム権利者I Dを付与する。この行為は例えば、第2図の窓口Wで行われ、管理簿N Tで管理される。プログラム権利者3-1は例えばP 1というプログラム権利者I Dが付与されているものとする。

プログラム権利者P 1は今、有償プログラム4 aと4 bを作成したとする。このプログラムに上記プログラム権利者I DであるP 1、プログラムのバージョン (版) 及び利用料金等のプログラム固有データをプログラム権利者は付与し、カセット型の磁気テープ等の記憶媒体に格

納し、店頭販売若しくは通信販売等でプログラムの配付を行う。勿論オンラインで回線経由での配付も可能である。

一方、ユーザは種々の雑誌や店頭等で、自分の目的にあったプログラムを探す。そして、目的のプログラムがS S協会のメンバが作成したものであり、第2図の4 a だったとすると、該プログラムを極低価格または無料で取得する。ユーザのデータ処理システム1にはそのデータ処理システムにS S協会2の登録を受けたプログラムを処理するための機構として、ソフトウェア・サービス・ユニット8がインストールされていなければならない。このソフトウェア・サービス・ユニット8には、ユーザ識別符号メモリ9からのデータと、利用される有償プログラムに付与されたプログラム固有データ及び利用プログラム履歴メモリの内容をチェックし、利用可否を判断する利用可否判定処理部10、及び、利用プログラム履歴メモリ11の内容に関し、プログラム利用履歴を出力したり、利用可能金額を更新したりする入出力処理部12を備えている。この入出力処理部12は、各ユーザにより種々の形態をとることが可能であり、オンラインで直接離れた場所にあるファイルに転送するものや、外部記憶媒体、特に磁気カードやマイクロ・プロセッサを中心に備えたICカード42が含まれる。その利用形態により、種々のソフトウェア・サービス・ユニット8が存在し得る。

データ処理システム1が有償プログラム5を利用する時、つまり、ジョブ制御言語の解読結果で該ソフトウェアの利用をOS部13が検出すると、その旨がソフトウェア・サービス・ユニット8に通知される。これは、特権割り込みと同等の制御で良い。ソフトウェア・サービス・ユニット8は利用プログラム履歴メモリ11中の利用可能金額を読み出すと共に、該有償プログラム5内にあるプログラム固有データからの利用料金を求める。この利用料金を上記利用可能金額から減じる処理が次になされる。その結果が、負だったら、そのプログラムは利用不可である為、その旨がOS部13に通知され、例えば、システムメッセージ「プログラム4aは残高が無いので利用出来ません」が表示装置17に表示される。

(後述の如く、負の場合でも条件付きで利用可とすることも可能である。)

逆に、上記利用可能金額から利用料金を減じた結果が負でなかったら、該減じた値を利用プログラム履歴メモリの利用可能金額の記憶領域へ格納するとともに、そのプログラムに付与されているプログラム権利者IDである。P1とその利用料金、及びユーザ識別符号メモリにあるユーザ識別符号を同じく利用プログラム履歴メモリ11にその利用明細として格納する。勿論、そのプログラムを識別するためのコードも料金支払いに不必要的情報ではあるがプログラム利用状況を把握するためのデータとして利用価値があり、利用プログラム履歴メモリ1

1に格納される。そして、OS部13に対して、処理の続行を促す。

以下、同様に処理が進められる。従って、利用プログラム履歴メモリ11には常に残金として利用可能金額が記されていると同時に、プログラム権利者ID毎にどのユーザ識別符号のユーザが幾ら支払うべきか記されていることになる。

10 本システムにおいては、利用プログラム履歴メモリ11の利用明細データが格納される領域は所定量または所定額となっており、該限界を越えた場合には利用プログラム履歴メモリ11の内容を空にする処理が必要となる様構成してある。高額の場合等、途中でその利用状況をS S協会へ報告させる手段を設けてある。この利用プログラム履歴メモリ11の残高メモリに対しても、入出力処理部によりその額を外部より増加可能としている。銀行オンライン方式と同様の構成または上述のICカード42をS' S協会より所定の料金でユーザに購入させ、そのICカード42内に記憶されている料金分を増加させる構成をとり得る。

20 プログラム固有データとして特約データを含めることが本発明で可能となる。この場合、上記利用可否判定処理部10はプログラム固有データの中に特約データが記入されていると利用者固有データに利用特約コードが有る場合のみ利用可と判定する。これは、プログラム権利者が特に特定プログラムについては、その利用者を把握しておきたい時に便利である。利用特約コードを利用者が得るためには、利用者はS S協会と特約をする必要があり、特約をするためには当然のこととして利用者の名前などがS S協会に登録されるので、プログラム権利者がその名前等を把握するのは容易である。また、その特約内容として報告義務を課する様にして、例えば、S S協会へ報告するのをやめ、下記の如き報告に対する所定割引きによってもうけることよりは、プログラム作成者へお金が支払われることがないようにすることを選ぶというライバルへお不正行為のような、ダンピング類似行為を防止したりすることも可能となる。

40 本システムでは、利用プログラム履歴メモリ11の中の利用明細をS S協会が知ることがその利用されたプログラムのプログラム権利者へ料金支払いをする上で必須である。実現方法として、利用明細の報告があった場合、その内の例えば10%をユーザに返済するという手段を講じてある。従って、ユーザとしては、報告した方が自分の利益になるので、殆どは報告をすることになり、プログラム権利者は確実にその利用量を回収する事が可能となる。第2図では、報告を受けたS S協会2は、プログラム権利者IDで管理簿NTを参照し、その対応した振り込み先口座へその料金を振り込むという処理を行う。

ICカード42を用いた場合でも全く同じであり、用済みICカード及び換金したいICカード42は同じくS

S協会へ届けられる様考えられている。即ち、S S協会では、I Cカード持参者または送付者に対して、利用金額に応じ、I Cカード返済褒賞金額を決定してある。例えば、利用金額累計の10%及び残金としての利用可能金額とを返却している。このようにすることで、大部分のI Cカード利用者は、たとえ残金が0であろうとも、購入価格の10%が返済されるために、必ずI Cカード42を最後にはS S協会に届けることになる。このI Cカード42は単なるカードだけでなく、経済的価値を有しているものであり、それ自体が通貨の代用として社会に流通し得るものである。I Cカード42を受け取ったS S協会での処理は上述と同様の処理を行う。

逆に、カードの現金化を行わず、次のカード又はそのカード自信に金額移算のみを許すようにすれば、カードの残額変造に対する防護機構の重要性を、現金で精算する場合より低くできる。

従って、プログラム権利者は単にプログラムをユーザに渡した後は、所定の銀行に利用料金が振り込まれるのを待っていれば良い。更に、社会に若しデッド・コピーという不正を行うものがいれば、該コピープログラムには、オリジナルなプログラム権利者のプログラム権利者IDが入っており、その利用料金はすべて正当なプログラム権利者の口座に振り込まれることになり、「複写大歓迎」という有償プログラムシステムが実現する。

そして、他人のプログラムを複写して、自分のプログラム権利者コードを付与する不当な取引が存在しても、その履歴が把握可能となり、損害賠償額が明確になり得るので、その点でもメリットがある。

第3図は、第2図の実施例の詳細、構成を示したものであり、前図と同記号のものは、前図と同じものを示し、11aは通貨単位も含む利用可能金額を格納する残高メモリ、11bは利用明細メモリ11cへの書き込み位置を示すポインタ・メモリ、21はプログラム権利者ID21a、プログラム番号やその版数等のプログラム識別ID21b、その利用料金データ21c、利用状況や特約データ等で料金を決める割引率データ21d、等を格納するプログラム・データ・メモリ、22は割引処理部、23は残高があることをチェックする残高チェック処理部、24はポインタ・メモリの示す値が所定値以上か否かを判定する利用明細メモリ領域チェック処理部、25は残高メモリに格納されている残高でプログラムを利用できるか否かをチェックする利用可能性チェック処理部、26は残高メモリ更新処理部、27はポインタ・メモリの内容を+1するポインタ更新処理部、28は利用明細メモリ11cへの書き込み処理部、29はOSへのOS応答処理部、30は利用明細メモリ11cのアクセス位置を制御するアクセス制御部、31はユーザのチェックを行うユーザ・チェック処理部、32はキーボードよりの指示で残高メモリ11aへの増分をその妥当性をチェックした上でフェッチしてくるための増分フェッチ処

理部、33は残高メモリ11aへの加算処理部、34はポインタが0より大か否かを検出するポインタ値チェック処理部、35は利用プログラム履歴メモリ11の読み出し処理部、36は外部への転送処理部、37はポインタを-1するポインタ減算処理部、42はI Cカードである。

ソフトウェア・サービス・ユニットS S Uは、3大処理に分けられる。その1は有償プログラムの利用時の処理、その2は残高メモリ11aの内容を増加する処理、

10 その3は利用プログラム履歴メモリ11の内容を外部へ転送するための転送処理である。それらを順次説明していく。

始めにその1の処理を説明する。

キーボード16よりの指示でまずユーザ・チェック処理部31が動作する。ここでは、これから処理を行う者が、正当であることをチェックする。(この個人認証処理は、本発明では省略したが、その1の処理及びその3の処理で採用可能のものである。)簡単には、キーボード16からの暗証コードとユーザ認識符号メモリ9の内

20 容とが矛盾しないか否かをチェックする。矛盾していれば図中と④で示す処理が行われ、たとえば「暗証コードを入れ直して下さい。」なる旨のメッセージを表示装置17に表示する。矛盾しなければ、入出力処理部12を介して、I Cカード42などから増やすべき残高をフェッチする処理を行う。これは、オンラインでセンタより所定の暗号チェックを交わした後、キーボードから増やすべき残高を得てもよいし、入出力処理部12に接続されたI Cカード42より得てもよい。

得られた増やすべき残高は加算処理部33にて残高メモリ11aの内容に加算され、再び残高メモリ11aに格納される。

次に、その2の処理を説明する。

キーボード16よりの指示でまず残高メモリ11aが残高チェック処理部23でチェックされ、負(特別な処理形態を考えることも可能だが本来あり得ない)または0の時は①で示す処理が行われ、たとえば「残高無し」のメッセージが第2図の表示装置17に表示される。それ以外の時、次にポインタ・メモリ11bの内容がチェックされ、MAX値の超過有無が調べられる。MAX値として、利用明細の記載済み項目数、又は、利用された金額でS S協会へ報告未完了の累計を用いることが可能である。MAX値を超過している時②で示す処理が行われ、たとえば、「利用明細メモリが不足しています。一度、利用明細をS S協会へ転送して下さい。(又は、I Cカードを差し代えて下さい。)」なるメッセージを第2図の表示装置17に表示する。

ポインタ・メモリ11bの値、即ち、記載済み項目数が所定のMAX値以内であれば、次に、プログラム・データ・メモリ21より利用料金データ21cと割引率データ21d及びユーザ識別符号メモリ9の情報を用いて、

割引処理部22は利用料金を求める。例えば、特定の資格を有する人は特別割引きにしたりする処理であり、所定回数迄は試用期間として極安価にしたり、または無料にしたりする制御も可能である。勿論、特約データの有無をチェック可能で、特約のない利用者は利用者固有データ中に利用特約が存在せず、その場合、「特約がなされていませんので、このプログラムは使用出来ません。」なるメッセージが表示装置17に表示される。更に、利用料金として、1より小さい比例定数を有する等比級数を採用すれば、無限回使用した場合の料金がわかるので、将来の必要経費が見通し可能となるような、利用者に喜ばれる方式をとることも可能となる。

この割引処理部22の出力が即ち、そのプログラムを利用した時の料金を意味している。その値を用いて、利用可能性チェック処理部25は残高メモリ11aの値から割引処理部22の出力値を減じ、その結果が負か否かをチェックする。負であれば③で示す処理が行われ、たとえば「残高が不足しています。」なるメッセージを表示装置17に表示する。負でない時には、残高メモリ更新処理部26が残高メモリ11aの値を該減じた結果に更新し、ポインタ更新処理部27にて、ポインタ・メモリ11bの内容を+1する。そして、書き込み処理部28は利用明細メモリ11cに、ユーザ識別符号、プログラム権利者ID21a、プログラム識別ID21b、通貨単位を含めた料金等を格納する。ポインタ・メモリ11bはアクセス制御部30に対して新格納場所をポイントしており、その新格納場所へ上記データは格納されることになる。その後、OS応答処理部29はOS部13に対して利用可能を指示する。

次に、その3の処理について説明する。

キーボード16からの指示でまず、ポインタ・メモリ11bの内容がポインタ値チェック処理部34にてチェックされる。0より大きくない場合は、「利用明細メモリの転送は完了しました。」なるメッセージを表示装置17に表示する。0より大きい場合、読み出し処理部35は該ポインタ・メモリ11bで指定されている領域の利用明細メモリ11cの内容を読み出し、転送処理部36はその内容を入出力処理部12により、オンラインでセンタであるSS協会へ通知する。ICカード42の場合であれば、このICカード42への記帳処理がなされる。そして、次にポインタ減算処理部37はポインタを-1し、再び制御をポインタ値チェック処理部34へ移す。ポインタ値チェック処理部は0より大か否かをチェックし、0より大きくない場合は⑤で示す処理を行い、たとえば、その旨を表示装置17に表示する。この様にして、ポインタ・メモリ11bの内容が0になる迄処理は繰り返される。その結果として、利用明細メモリ11cの内容はすべてSS協会へ通知されることになる。

上記の様な構成としたことにより、残高メモリ11aが0になる前でもSS協会へその利用明細メモリが通知さ

れるので、金額が残高メモリ11aに格納されても、利用明細への記入量は限定できるので、たとえ障害で利用明細が失われても、被害は小さく留めることができる。更に、ユーザ識別符号により、利用明細メモリ領域チェック処理部24でのMAX値を動的に変更する様にすれば、信用度の高いユーザに対しては、その利用明細の報告より長時間単位とし、信用度の低いユーザはその利用明細の報告を短期間とする等の制御も自由に行うことも可能となる。

10 10 尚、上記実施例では、残高メモリ11aは利用された分だけ直ぐに減じ、常に利用可能な金額を表示している例で説明したが、イニシャル値を格納して、その値を利用明細メモリの内容が外部へ出力されない限り変更せずにそのままにしておき、残高を問われる毎に、該イニシャル値から利用明細メモリにある明細の合計を差し引くという処理を行う形態にしてもよいのは勿論である。この場合の実施例について次に説明する。

第4図に示す実施例構成は、第3図の実施例構成を変形したものである。この第4図の実施例では残高メモリ11aの内容は、イニシャル値にもしもICカード42などから増分値の入力があればそれを加算処理部33で合算した値に設定され、第3図の実施例の場合のような有償プログラムの利用が行われる都度その利用料金を減額して残高を更新する処理は行われない。この残高メモリ11aの内容は、転送処理部36が利用明細メモリ11cの内容を外部へ転送しない限りそのまま保持される。

20 20 そして利用可能性チェック処理部25は、有償プログラムの利用可能性をユーザの利用可能金額の面でチェックする際、34、35、47、37で示される各処理部を起動し、利用明細メモリ11cの内容を読み出して、各利用料金を合計する処理を行わせ、その合計値に有償プログラムの利用料金を加えた額を残高メモリ11aの内容から減算して、減算結果が負でない限り利用可能(OK)と判定する。ここで利用可能と判定された場合には、第3図の実施例の場合のような残高メモリ11aの残高更新処理は行われずに、利用明細メモリ11cに対する利用明細データの格納のみが行われる。なお、第4図において説明されなかった構成部分の動作は、第3図におけるものと同様である。

30 30 40 第5図は、本発明のさらに他の実施例であり、第2図の実施例において中央処理システムCPS7内に設けられていた利用プログラム履歴メモリ11をICカード42内に移した構成となっている。図において、前図と同記号のものは前図と同じものを示し、37は主記憶装置、38は中央処理装置、39はチャネル装置、40は入出力制御装置、41はICカード・リーダ、42はICカード、43はマイクロ・プロセッサ、44はマイクロ・プロセッサ43を動作させる為のプログラムが格納されたEEPROM(イー・ピー・ロム)、45は入出力ポート、46は内部バスである。

動作は、前図と全く同じであり、ただメモリが内部ではなく、外付けになっている点が異なるだけである。従って、有償プログラムが利用可能か否かは I C カード 4 2 内の残高メモリ 1 1 a を用いてチェックされ、OK ならばマイナスの更新処理がなされ、且つその利用明細が利用明細メモリ 1 1 c に格納される。

但し、料金の支払いについては、まずユーザは所定の S S 協会に代理店等で購入をする。購入の際の価格に応じた金額が残高メモリ 1 1 a に格納されている。従って、ユーザはその I C カード 4 2 を利用可能金額だけ利用すると、その I C カードを S S 協会に届ける。すると、その残高メモリ 1 1 a を残高があればその金額と、利用した金額に対して 10% の払い戻し金額とを合わせて得ることが可能となっている。故に、S S 協会では、確実にプログラム権利者に対してその利用料金を支払うことが可能となる。

また、I C カードの中の E P R O M に残高メモリ 1 1 a の内容を増加する方向の処理を行えない様なプログラムを格納したり、プログラム固有データが勝手に変更されないように該データを暗号化してプログラム中に分散して配置し、I C カード中に設けたキーで該暗号を解くようなプログラムを格納したりしておけば、それだけ I C カードの不正使用は減ることになる。

尚、上記全文における利用者識別符号は、利用者が割引等の、利用者の身元に依存する特権を得たいとき、または 1 個のソフトウェア・サービス・ユニット (S S U) を用い、複数の支払元の利用者がプログラムを利用するとき以外には、必ずしも必要ではない。利用者識別符号が利用明細メモリ 1 1 c に格納されなければ、その利用者固有の割引等を受けられない反面、利用明細が S S 協会に報告されてもその利用者が知られてないので、利用者のプライバシィは完全に保たれる。

また、上記実施例では残高メモリが “0” の時には、処理装置が動作しない例を用いたが、残高が少なくなってきたらその旨の表示を出す方式や、所定金額迄は警告を表示しつつ負を許し、該負の値を更に越えたらソフトウェア・サービス・ユニットの基本部分を破壊し、以後、ソフトウェアのサービスを受けられない様にしてしまう方式も考えられる。こうすることで、即停止の心配という心理的バリアを除くことが可能となる。

さらに、ソフトウェアを使用するたびに、コイン投入等、自動的に入金情報を残高として格納する方式も可能である。

また、ソフトウェア・サービス・ユニットは、通常の O S とデータ処理システムにおいて共存することも可能であり、既存システムにこのソフトウェア・サービス・ユニットを組み込むことが可能であるので、普及ということにも効果がある。

10 また、プログラム登録データが勝手に変更されることを防ぐために、有償プログラムを暗号化しておき、その暗号を解くためのキーを I C カード中に備えることも可能である。

また、I C カードにおいても、その内容を S S 協会に提出して再利用可能な如く構成することも、E P R O M の使い方次第で可能である。

更に、本発明は、有償プログラムを例にして説明したが、ソフトウェアの有償サービス、例えば電波による有償画像サービス、ビデオカセット、及び、有償情報提供等にももちろん適用可能である。

20 (g) 発明の効果

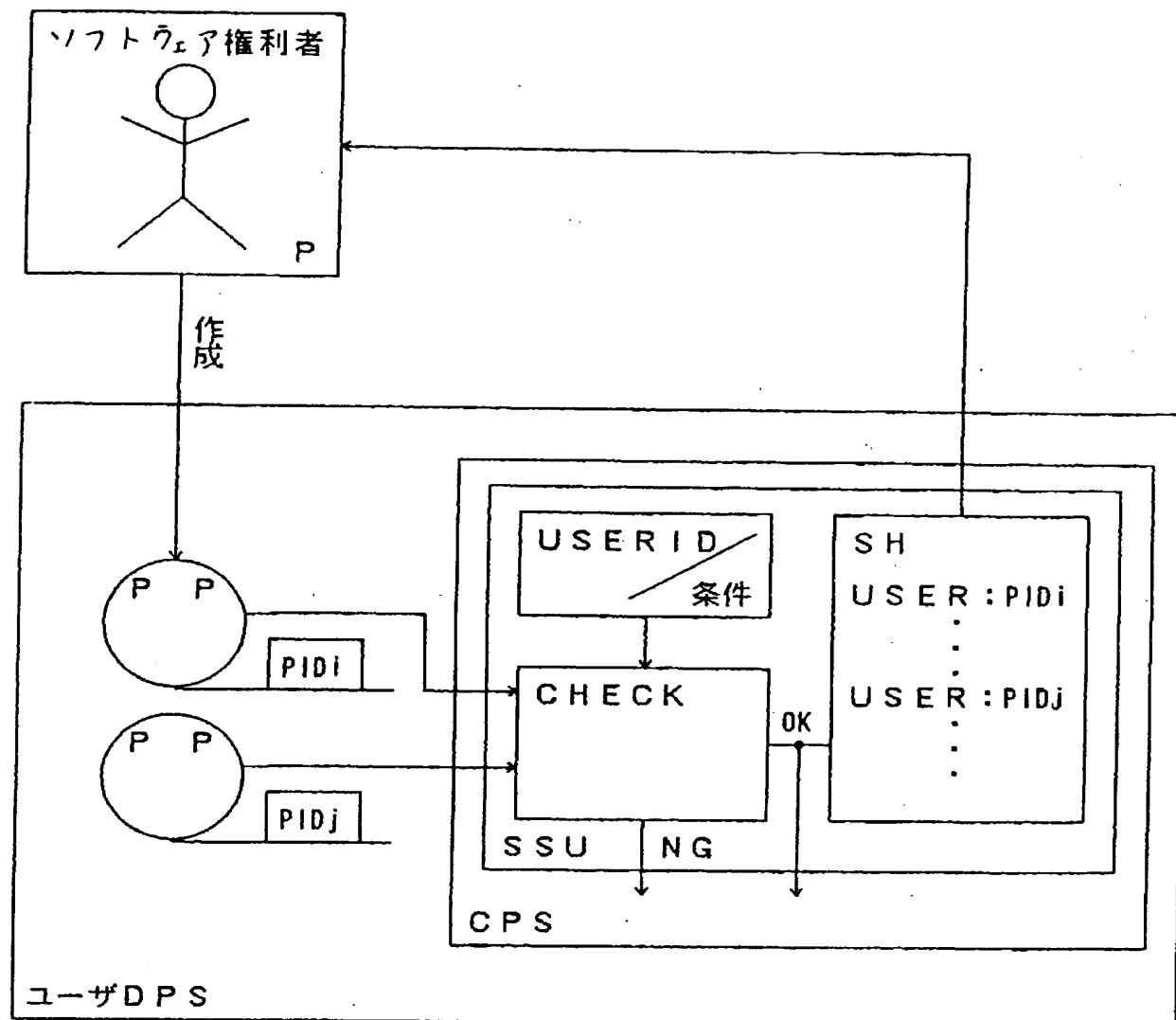
以上述べた様に、本発明によれば、ソフトウェアの利用状況に関してソフトウェア権利者は確実かつ容易に把握することが可能となり、ソフトウェア権利者の権利の保護を図りつつ多様な形態でのソフトウェアの利用を促進することができる。

【図面の簡単な説明】

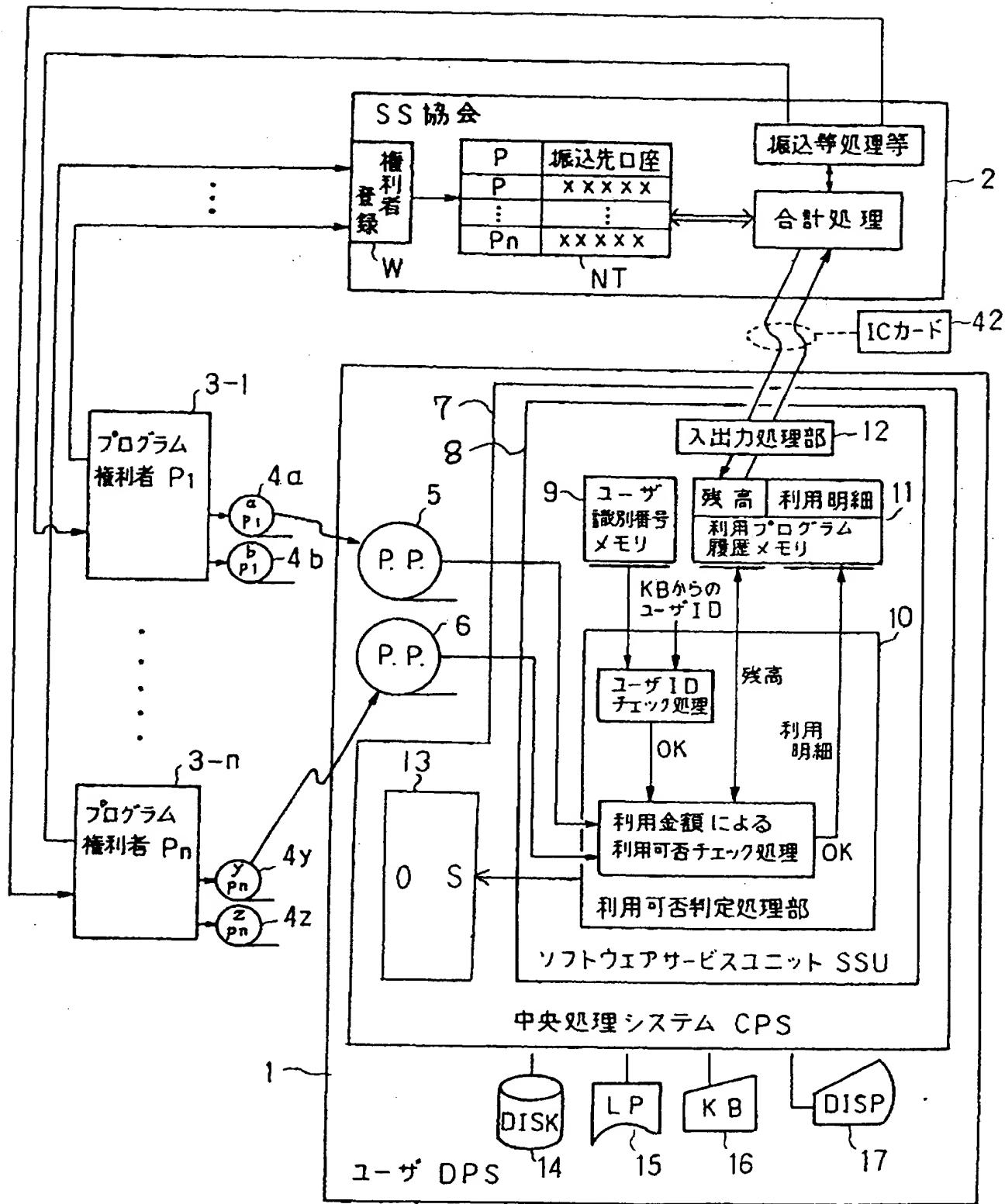
第 1 図は本発明の概念を説明するための図、第 2 図は本発明の 1 つの実施例の基本構成図、第 3 図は第 2 図に示す実施例の詳細構成図、第 4 図は本発明の他の実施例の構成図、第 5 図は本発明のさらに他の実施例の構成図である。

図において、1 はデータ処理システム、2 は S S 協会、3-1 ～ 3-n はプログラム権利者、5 は有償プログラム、8 はソフトウェア・サービス・ユニット、9 はユーザ識別符号メモリ、10 は利用可否判定処理部、11 は利用プログラム履歴メモリ、11 a は残高メモリ、11 b はポインタ・メモリ、11 c は利用明細メモリ、12 は入出力処理部、16 はキーボード、17 は表示装置、21 はプログラム・データ・メモリ、25 は利用可能性チェック処理部、42 は I C カードである。

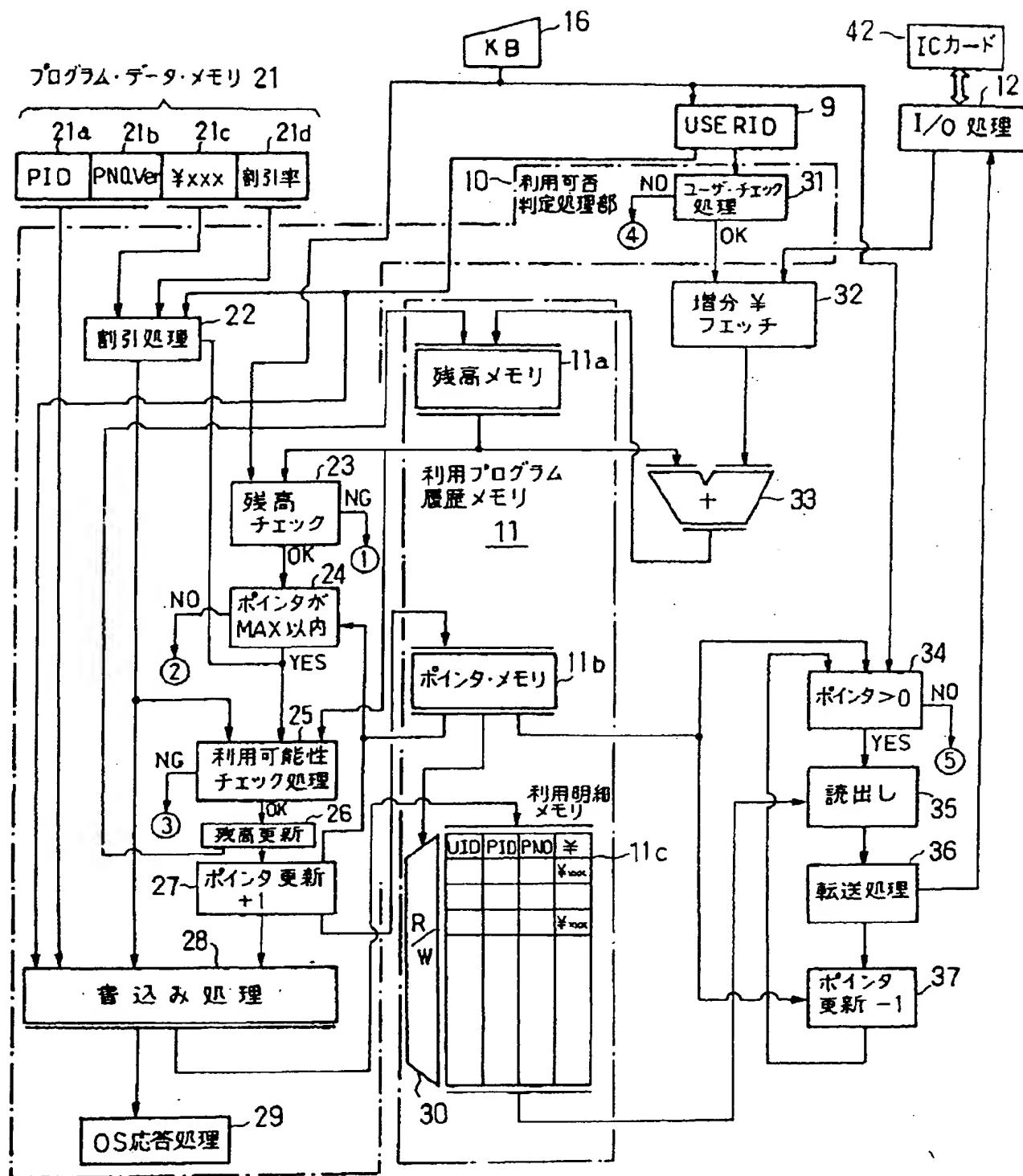
[第1図]



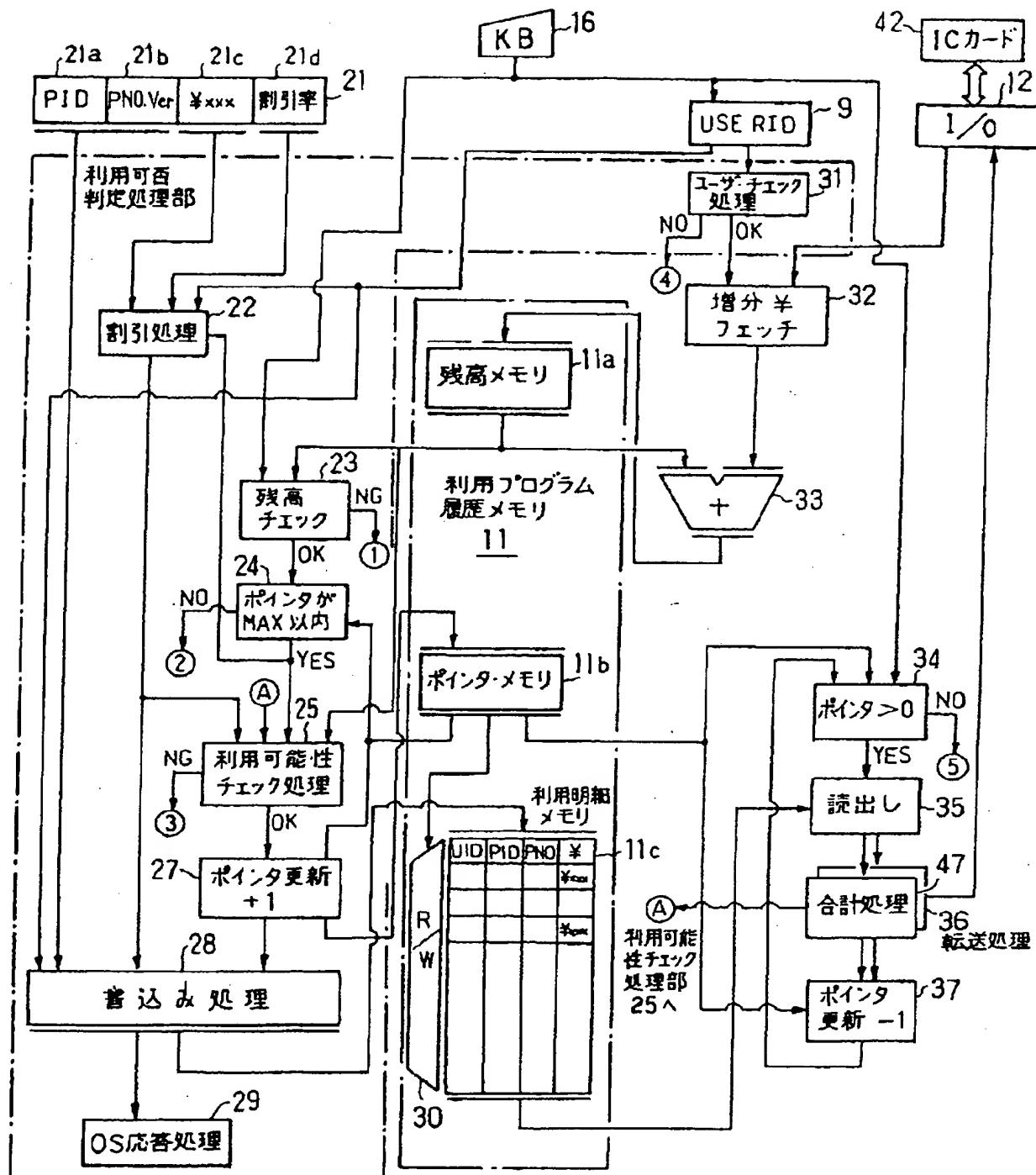
【第2図】



【第3図】



【第4図】



[第5図]

